

「まあまあ懐かしい曲がかかっているわ」

まるでこの曲を待つてもいたように、老女の華やいだ声が美沙の背中側から聞こえてきた。美沙は軽く振りかえった。

『ムーンリバー』ですね』

同席の男性が自信ありげに答えている。

そうだ。流れるようなワルツだ。美沙も確かに聞き覚えのある曲だ。やっぱりこの店はダンス曲ばかりを流している。ちらっと夫の影が掠める。

喫茶店を出ると、頭の上に、病院の大きな建物が覆いかぶさるようにそびえたっていた。

美沙は自分の気持ちを抑えるように、背筋を伸ば

して病室へと向かった。

四人部屋の患者たちは昼時だがカーテンで仕切り、互いに様子をうかがう事はできない。

「失礼します」

形式的な、そして消え入るような声でカーテン越しに他の三人に断りを言いつて、夫のベッドの方へ入った。

「来たのか」

普段通りだ。美沙も居心地が悪いはずだが、いつもの口調で答えた。

「隣の会長さんが今朝やって来て、自治会の班長さんたちが揃って見舞いに来るんですって」

「わざわざ来なくていいのに」

「私もそう言ったのですが、一週間以上入院

したら、班長さんが見舞いに行くのが自治会の決まり事だからしかたないわよ」

「それで、何時頃になるんだ」

「お昼過ぎてからって言うていたから、もう来る

頃かな」

「一時間だから、そろそろだな」

夫のいつもと何も変わらない口調だ。美沙だつて見舞い客が来るとわかっていながら、気まずい空気などつくりたくもない。

昨日、偶然見つけた写真のことはもうしばらくの間、素知らぬふりをしておこう。結婚生活三十年、そのくらしいのつくり顔はできる。

「今ね、下の喫茶店でランチを食べて来たわ」

「ふーん」

「噂通りよ、美味しかったわ。地味だけどいい感じの店だったわ」

「ふーん」

今しがた喫茶店で一緒だった二人の姿が思い浮かぶ。

「ふーん」

いつも通りの反応だ。店を紹介したときの能弁はやはり例外中の例外だったようだ。

「それにね」

ダンス曲がかかっていたことを言おうとしてはつとした。そんなことを言ってしまうは話し様で気まずくなるかもしれない。今は心の中に留

めておこう。

「なんだ」

夫がいぶかし気に問いかけてきた。

「いや、何でもないわ」

美沙は言葉に詰まった。その時だった。ざわざ

わと人の気配がして、

「信行さん、大変だったんだな」

自治会の班長さんたちがやってきた。

「いや、こんなことで恥ずかしい。わざわざす

ません」

すこぶる低姿勢の夫を囲んで、男たちの

日常談義が始まった。

「うちの庭は一度も庭師に頼んだことはないよ。

年に二度、俺が手入れする。信行さんのおやじさ

んだって自分でしていただろうに、な」

少々自慢げに話すのは夫と同じ歳の安井さ

んだ。そして、頼もしく付け加えた。

「今度手入れする時には、手伝いに行くよ」

深刻な患者ではないので、病室に笑い声さえ

出ている。

「まあ、仕事も辞めたことだし、この際ゆっくり

治して、な」

殺風景な病室での男同士の会話を、美沙は黙

って聞いていた。やがて見舞い客たちは帰って

行った。

「久しぶりに皆と話したら、ちよつと疲れたな」

ひとり言のようにぼそぼそつぶやいた夫は、い

つの間にか眠りだした。

難しい病人ではなく、怪我人なのに疲れただ

なんて、と夫の態度にうんざりしながらその横で

時間を過ごすような、穏やかな愛情が今の美沙

には見当たらない。

夫が目覚めないようにそつと病室を出て、友人

の律子に電話をした。心の内を打ち明けるつも

りなどなかったが、なぜか一人でいることが怪し

く感じられた。未だ仕事に精を出している律子だ

つたが、今日は土曜日だ。居るかも知れない。

「なあに、めずらしいわね」

明るい声が返って来た。

そう言えば、美沙の方から昼間に電話などする

ことはめつたにないことだった。

「総合病院からの帰りなの。ちよつと時間があ

つたから。土曜日だし、久しぶりにお茶でもと思

つて、ね」

今の悩みを打ち明けて、安易な慰めが欲しい

わけではない。律子にさえ心の奥底はみせない

まま、なめらかにしゃべっている自分に情けなさ

が過ぎる。

「私も今日はゆっくりできるからいいわよ」

律子の返事は早い。美沙の迷える気持ちを持

つてもいられるかのように、快く受け入れてくれ

た。

「病院からだとうちへ来てよ。その方がいいわ、ね」

律子の心に甘えることにした美沙は、途中で彼女の好きなシュークリームを買って、車を走らせた。

「私ね、やせ我慢でなくここに住んで本当に正解だったわ。庭付きの一軒家は独り者では到底管理できないわよ」

律子はマンションでの暮らしを満喫していた。そんな律子を時にうらやましくさえ感じるのだが、美沙にはそれほどの事情も勇気もないことはわかっていて。決断することも、努力することも才能だと思っていた。

「もう思い切って羽を伸ばせば」

「そうね」

「気候もいいじゃないの。絶好のチャンスよ。どこかへ行きましようか」

即答できない美沙に向かって律子は続ける。「今だったら付き合ってもいいわよ」

「ええ」

律子の明るい早口に押され、美沙は曖昧な相槌をうつだけをやっとだった。

「ねえ、そうしようよ。京都か、奈良にでも行きましようよ」

「そうね」

やっぱり生返事しかできない。

律子はいつも通り、人の気持ちを探ることもなく、美沙を迎え入れてくれた。

「手土産なんていらぬのに、美沙さんはいつも気を遣ってくれて、ありがとう。このシュークリームは大好きだから嬉しいけどね」

律子の顔がほころんでいる。この人の中にはこの季節のようなさわやかな香りがあった。

「どう、旦那さんの具合は」

「ええ、ありがとう。怪我だからね。どうってことないわ。まして肩だし、日にちが経てば治るわよ」

「長い間勤めたのだから、この際ゆつくりと養生のつもりで治したらいいのよね。美沙さん

律子の素早い思惑に今は付いていけそうにもない。

「一晩泊まりで、ね」

小さく頷いた。美沙の気のない返事を悟ったかのように律子はあわててお茶を注ぎ入れた。

「ごめんね、何時も年下の私が仕切ってしまった」

「いいのよ。あなたのほうがしっかり者だからありがたく頼ってまーす」

美沙はべこりと頭を下げた。

すると律子は急に真顔になって

「話が変わるけど、慶太がね」

律子の息子だ。

「慶太がね、アメリカに行くというのよ。今さら  
とおも と思うけれど、あの子にはどうしてもだめとは言  
えないのよ」

離婚した時、一人息子の慶太君のことだけがネ  
リックになったと言っていた律子だ。

「やっぱり負い目になってね」

律子は視線を落とした。

「私は離婚してよかったと思っ  
ていてるけれど  
慶太にはあの頃、一番父親が必要な年だったかも  
しれないからね」

「潔く生きていると思っ  
ていた律子にだっ  
て  
気をもむことがある。全てが円満な離婚なんてあ  
るはずがないのだ。」

「やっぱり男だと思っ  
たわ」

微笑みを浮かべた律子は母の顔だ。

「美沙さんは二人とも近くでいるからいいわよね」

「でも、子供は子供の生活があるから、近くても  
遠くてもいっしょよ」

「慶太がアメリカへ行ったら、私も大好きな  
本物のミュージカルでも見に行こうかしら」

「そうよ、そうしようよ。一緒に行きましょうよ」

現実には無理だろうが話は弾んできた。

「男ってわかんないね。とてつもないことを考  
えるんだから」

「いいじゃない。夢があるんだから。子供たちは  
あと五十年も生きられるのよ。今なら何でもでき

「慶太君、アメリカで何するって。新聞社は辞め  
るの」

「そうよ、せっかく入ったのにね。メディアとか  
イベント関係のこともっと知りたいんですつ  
て。『アメリカ行きが夢だったんだ』って言うのよ」

「彼、幾つだっけ」

「もう直ぐ三十歳。今まで言い出せなかったの  
よ、きつと。今だからかな。今しかないのかな。  
まあしかたないわ」

「男だからね。いいじゃない。律ちゃんだつてそ  
うしたらアメリカへ行けるじゃないの」

「それでも思っ  
て賛成してやら  
ないとね。身体ば  
かり大きくて、案外気が弱いと思っ  
ていたのに。」

「と  
おもうんでし  
ょう。慶太君はあなたに似てし  
つ  
かりものだから大丈夫」

「そうかな。やっぱり親としたらね」

日頃の律子なら息子の旅立ちに諸手を挙げて  
賛成すると思っ  
ていたのに、意外と気弱な彼女を  
見たような気がした。

(以上5月14日放送分)